扶桑皇統記圖會

三編

へ13
2109
11

2109
11

浪華好華堂主人著編
同柳齋重春先生画圖

扶桑皇統記圖會 後編 全七冊

浪華書肆 岡田羣玉堂
岡田群鳳堂

扶桑皇統記圖會後編叙

本朝 天武帝の御代 古昔より今に至りて
千有餘年。聖賢の美跡を高代知し
召て民を撫。天地倶久しく悠久なるべき
石の巖を仰ぎ。悦びあるこゝ
いとゞ天地武ひい風雲あるべきなり
しるべ。[illegible]

日輪隱び出ぬるごとく世間暗の
にして淳古ふと世を治めるの
治まる所代なれども國を盜まるる人民出
主位を奪ひ富貴を屬ひ良を殺
亂を起し兵革闘諍の響となりて
天の雲晴れふたいれる所謂
時の變なるべし　本朝乃

歷史に載て昭らかなれども童蒙稚安に漢
易にうとき國野亨る新にして國字
書にあり出像を知へ　天武帝の御時より
稱德帝の御宇にいたり初輯として獨か
出づ今まで編る　光仁帝より
朱雀帝の御宇に畢ぬ是より以來上世
神武の御世に遡て下い　後陽成帝に

序守まで都てはこの年の治
亂得失人倫の善惡を明らかにし
天變地妖を正史に載せ
大成功むと既に十年その物を新まる
こゝに僅に輯うて大志を果さず空く
宇下の恥を留めぬ然れども這回刻成て世に
公ふなれば素門に序蘭を余に請
余は幼の野夫に風を濁ていまだ一面も
識ることなしかるにその志を一なるものゝ如
遲せば恐らくは世に黙殺を蒙らに
述て四方の雅士の机下に捧ぐ
于時嘉永辛酉春三月
東都 松亭主人 題

委任捆外機
密要整
其旅東征
薄伐
以斥蝦狄
旋奏奥
羽清平

坂上田村麻呂

入定の後四日を過て
太上皇弔祭書を
降し給ふ其書
よい〳〵

真言洪匠密教宗師
邦家憑其護持動植
荷其德恵豈圖
崦嵫未遍無常遽侵速
馳草書弔慰大定
元亨釈書第一奏示見ヨリ

金剛峯寺
空海

浦嶋太郎
万葉

藤原時平公
誇君寵亡賢臣暫時雖在其位暉中其威天責其惡罹異病両耳青蛇淨藏持念耳傳世俗不知信偽

黄門行平
忽起心兵
戯言出思
和歌
發情
不邪
不媚
有大有名
繪島風韻
全非鄭聲

陽成帝孔
愛嬪也
妬婦奸計
一朝露
卯製
筑波根之
峰侵
落涙水
無能川
憂胷積而
閑止成
奴留

扶桑皇統記圖會卷中總標目後篇

一ノ上　卷之一上下

光仁天皇御治世　奥州兵乱征将下向條
金窪膽沢強弓力戰　大洋益立敗軍之條
於阿隈河宮軍与夷賊攻戰　大洋益立不覚之條
金窪兵太勇と揮て京軍と責破る圖
金窪義心贈干敵曽　瑞雲禅師化度安達條
苦肉計畧安達焼敵柵條

一ノ下

桓武天皇御即位
安達八郎忍林と以て牢獄を破て却て敵方小降参する圖
東征使凱陣賞罰討　不破内親王母子流罪條
宇佐八幡宮託宣　蝦墓合戦征異之條
山城國長岡都経営　早良親王謫罪憤死條
早良親王の命と受て継人竹良容小種継を射る圖
築再新都造営大内裡　釈最澄開基延暦寺條

卷之二

山城國鞍馬寺開基　峯延法師退治大蛇條

奥州夷賊蜂起宮軍敗績　重而東征使下向條
鞍馬の峯延法力どりつて大蛇を退治す圖
感霊夢大養得奇子　坂上田村丸遇延鎮條
宮軍与夷賊干奥州合戦　田村丸武勇討大熊丸條
田村丸明智賊の大将を挫き賊将大熊丸を討圖
毘沙門地蔵の二尊雲中小顕いまし田村丸を援ける圖　其二
延鎮語両服士奇特　田村丸建立青水寺條
乾臨閑御尊諸継昇進　老人寿星出現大叔事
平城天皇御即位并譲位　嵯峨天皇受禅朝部擾乱
天皇賀茂齋院御幸　有智子齋院詩作條
浅山玄吾遭盜難入水　漢文兵太湖上助浅山事
浅山玄吾湖水小舟に漢舟の為に命を助る圖

卷之三

浅山過入隠室遭危難　悪僧伏刑浅山青雲條
无頼の悪僧隠室を見らまし浅山を擒にする圖
釈空海幼稚奇行　阿波大滝山土佐室戸崎苦行事

室戸の巷室ホ悪龍現ゞ空海と試る圖
以五筆書詩水上題詩條
空海師入唐求法
文殊童子ホ現ゞて空海ホ奇瑞を見せ給ふ圖
空海師帰朝東風
投筆兵隅法書新條
高野山開發伽藍造立事
東大寺蜂怪南圓堂建立
清滝川ヒ隔て空海願の文字を書圖
東寺賜空海西寺賜守敏
空海守敏法力優劣條
嵯峨天皇御譲位
守敏空海祈雨争行力條
女人禁制を犯して空海の母種々の
怪異ホあり圖
母八公阿刀氏望登高野山
山中怪異慈尊院之條

巻之四

放巨亀浦島到蓬莱
開王千宮浦島老死條
浦島が子蓬莱ホ至ッて遊宴歡楽を極む圖
仁明天皇御即位大礼
小野皇流罪之條
伊勢齊宮及建野々宮
恒貞親王隠謀露顕條
小野皇妻ホ閻羅王宮へ到る圖
従豊後國献白亀

巻之五

良峯宗貞詠哥遁世條
深草の帝の陵諸人群参の圖
文徳天皇御即位
位争名虎良雄角觝條
惟喬惟仁の御位争ひふたり大内相撲の圖
清和天皇御即位
伴善雄犯罪流刑の條
陽成院御即位
菅家系譜角觝盈觴之條
野見宿禰當麻蹴速と力競べの圖
於良香宅菅公試射條
春彦是善俱感奇夢
狂病乱行閑居條
陽成院意釣殿君御製
異形のものを並べて釣殿の石を壓ふ圖
光孝天皇御即位
行平須磨の浦ゆて松風村雨ホ遭ふ圖
行平詠述懐歌被為謫條
清和上皇御登霞
禁庭種々怪異の條
郁良香得鬼神奇句
菅公一時作詩條
羅生門ホ於て鬼神都良香ガ詩を嗣ぐ圖
醍醐天皇御即位
時平乱行奪叔父事條

巻之壹

朱雀院朝覲御幸
三善清行贈菅公諫書
三善清行天象を見て菅公ゝ書を奏する圖
仁和寺の法皇王上と諫めまいんと宮門ゝ立せまいん圖
菅公遺子道明寺林像
菅公流配所詠詩歌
菅公天拜山祈願 并薨去
寛平法皇筑紫雙岡
菅公筑紫天拜山ゝて祈願〳〵まいん圖
洛中天変内裏雷災
時平忠斉病薨去
太宰府天満天神宮居の圖
菅公贈官賜神号
時平光等謀臣ゝ菅公ゝ條
菅公得寃被謫西府條
播磨曾根手枕松の事
太宰府飛梅追松の條
渡會春彦忠實死去條
法性坊夢謁菅公亡霊條
奸徒雷死法性坊行力條
光定國菅根変死洛中共水條
延喜帝御譲位四海太平條

通計七十一條總標目畢

扶桑皇統記圖會後編巻之壹上下目録

一上
光仁天皇御治世
奥州兵乱征將下向條
金窪膽澤強勇力戦
大伴益立敗軍の條
於阿隈河宦軍与夷賊攻戦
大伴益立不覚の條
金窪兵太勇を揮て京軍を敗る圖
一下
金窪義心贈二寸敵曹
瑞雲禪師化度安達條
桓武天皇御即位
苦内計畧安達焼敵柵條

安達八郎忍術を以て宇獄を破り却て敵方へ降参する圖
東征使凱陣賞罰　不破内親王母子流罪條
宇佐八幡宮託宣神傳　蝦蟇合戦怪異の條
山城國長岡都經営　早良親王謫罪憤死條
早良親王の命を受て継人竹良容小種継を射る圖
築二再新都造営大内裡一　釋最澄開基延暦寺條

目録　終

扶来皇統記圖會後編巻之壹上

浪華　好華堂野亭参考

光仁天皇御治世

奥州兵乱征将下向條

人皇四十九代の聖主光仁天皇と申奉るハ天性帝徳を備へ給ふ。先朝の徳弊政を改め。賢を挙不肖を退け。絶を興し癈を立て万民を子の如く撫恤ひしゝ。宇宙昇平して四海波静かなるゝ世小止ぐ。されハ女色の惑ひ一女子の故より。東國小忽ち不時の兵革起り。其濫觴と尋るゝ。宝亀十年小紀廣純と云人陸奥守小任ぜられて奥州へ下り。國の政道を犯行ひ。此廣純ハ大納言兼中務卿の孫従四位上紀宇美の息男にて。権勢重く。人も厚く敬ひ尊ぶる小。廣純元来徳を脩ず。権威を専小て我意の裁判多く。且戎好む癖あり。奥小奥州の住人小伊治呰麻呂と云者あり。其本ハ蝦夷の嶋夷ハ

種類あり。生貨剛勇なる上頗る膽畧有れば、麾下に属する者追〻妻
くなりて、數郡を領し、勢強くなる。此些戸呂、兼て心を付て忍び通ふ女あり。其
容色衆に勝れ、都耻し紀風姿なりなると、廣純傳聞て、あぬ意に、あぐれ度
く文を贈て、呂統に、れども、女は些戸呂が思ふ人ところを悼りて、一度も返事せず、難面
てのみ過し、れば、廣純、弥心を悩ず。是、些戸呂が有史に、廉なぬなるべとて、家
人に命じて、一夜、晴に女が宿へ潜入せ、有無を言せず、理なく、女を奪ふ、我館へ
迎へ、百般言を尽し、呂統なるに、紀風流石浅なる女心とて、きも年月契し
些戸呂の妻とも忘れ、廣純の心に従ひ、なるに、廣純大に悦び、女を寵愛する妻
他に異なり、些戸呂、最愛の通妻、奪取れ、心狂焦し、怒憤れども、國司の
威勢に圧されて、奪返を妻能はず。よく〻時節と窺ひ、此恨と報ぜんとの
無念を隠して、色にも見せず。多くの賄賂を、廣純に贈り、絆と、媚諂ひ、
む、廣純、実に伏従せしと思ひ、心ゆち、解て、万端隔なく、些戸呂と、商議し、聊
も疑心なし。何の要慎もせざりし。些戸呂、廣純を、誑れ、なるして、独咲し、時を
窺ふ中に、一時、廣純が麾下の諸士、國政に、就て、諸方の郡縣へ、別れ赴く、廣純の
館、なるに、無人なり、れば、些戸呂、須波待、殺る、時節、ごとなれと、兼て、隨身
せし、野武士、膽沢悪太郎、金定淫兵太郎と、強勇の、溢者と、先として、究竟の者、二
百余人に、武具させ、夜中、前後、二隊に、分ち、廣純が館へ、ひそと、押寄、先表に、向
ひる、膽沢悪太郎、百人に、下知を、傳へ、倉率に、松明を、點し、連一斉に、喊を、唱ひ、
表門を、打破て、我先に、と、乱れ、入れば、廣純が、家人、何思もよらぬ、不意の、夜討に、奈
周障、騒動し、太刀よ、弓よと、騒ぎ、上を、下へと、そ、ぞ、る。廣純も、仰天して、必定、野武
士、山賊の、属なるべ、何程の、妻なるべ、蹴散せと、下知しるに、折節、在番の、武士、無
人にて、在合せる、衛士、五十余人、主の、下知を、承て、太刀、先と、揃へ、打入者を、散に、切拂ひ

門外へ追出さ。膳沢悪太郎も味方を励し。さて切進んで敵を門内へ追込加此互ひ
追つ返しつ紂つ紂きつて挑み戦ひける内哲戸呂金庄以下百余人ひて裏へと
歩破り。松明揮立て乱入れば女童共泣叫んで逃迷ふを情ある荒夷ども憐れと
幸ひに此所彼所に切伏ける。哲戸呂諸卒に下知し。彼奪ふ一女と生捕よと命じ
ける。兵士ども館の間毎くを尋捜し。遂に彼女を搦捕ける。廣純は表に在て
味方の士卒に下知を傳て在ける。裏門よりも賊兵乱入せりと聞て再び後に十人
余の家士を従へて奥へ引返さんとする。端なく哲戸呂と往合う。哲戸呂廣純
と戸ぐるより眼を瞋し大音に。ふや廣純你此國の守る大任を蒙りながら。仁
義を旨とせず貪戾を事として國人を虐げ苦め刺へ我愛妾を奪取て婬楽
弑恣にする不義無道言語日断なり。故に國人恨背て我に勧て今夜你を紂
しむる所なり。己が罪己を責ると観念し。我一刀を受て冥府へ赴よと詈りければ

廣純聞く大に怒り。恩を忘れ義を知らざる人面獣心天罰の程を思ひ知れと
太刀抜拂て撃てかかる。哲戸呂も望む所の妻敵と。打て太刀を揚て一往一来
戦へ吏二十余合。いまだ雌雄を決せざる所に。金庄兵太弓矢はげて兵を切
て放し。過まで廣純が胸板より背へと射通しぬ。大吏の手あれば暫も
堪ず苦と叫んで仰反に。哲戸呂透さず走寄て首をとて掻かるるを
主を紂せて残る郎党ども今は維ん為に命を賜へ。と銘く賊兵に斗り合
刺違て死るも有或は自身腹掻切て死る有て。主従六十余人ばかり抗に
紂死しけるぞ哀れなる。賊兵も五十余人紂れ手負は等に退かれど夜紂
に全く勝れた。賊徒ども大に悦び倉廩に乱入て金銀財宝絹布を尽く奪ひ
掠め館に火を掛て焼立勝鬨を揚てぞ引退ける。是に依て諸民大に震ひ
騒ぎ東西南北へ逃走り泣叫ぶ声四竟に震て絶なり。是より哲戸呂は勢ひ壮

ふかり。尚も野武士山賊を招き聚め。要害の地ふ柵を構て楯篭り郡郷を
犯し掠め恣ふ横行して威を國中ふ奮ひ。是ふ依て隣國の守護國司
大ふ怒り都へ飛馬を立て急を告る吏櫛の歯を挽ぐ如し。時ふ些ふ呂ハ彼
旧の愛妾を牢獄より縛索の中ふ曳出させ眼を瞋して睨と睨。やあれ婬婦
你年来の我恩義を忘まよくも廣純ぐ心ふ従ひ。世の綺ふも言ぐや己人
ふ雖面れぐ人ふ己ふ雖面と。始不便を加へふ今日ハ百倍して憎しと罵り太刀を
抜て心下を刺串れぐ。女天ふ叫び地ふ叫び七顛八倒してぐ死ぬる。此呂ハ
是を快しとふ咲ひ其屍を野外ふ捨させ。其後國中の美色ある女人の妻妾
とも言せぐ奪取て己ぐ側室と。恣ふ婬樂て上見ぬ鼓鳥のごく。不義の歓楽を
ぐ究めける。去程ふ都ふ東國より急馬の来る吏引も切ぐ。伊治些呂國司紀
廣純を攻殺し國中を犯して逆威を奮ふ。紛るるふぐ。光仁天皇孫ふ坐
文武の百官と召れて御評議の上中納言藤縄を征東大使と。大伴益立紀古佐
美を副将軍として軍勢凡九千余騎を授け。奥州の賊徒を征伐せらるる。
又安部家呂を鎮狄将軍と出羽國と守護ふらるる。斯て東征の将軍定り
れぐ藤縄益立古佐美ふと朝廷へ召る。右大臣と以て紹命を傳めらるる。今般
奥州の兇賊國司を殺し。郡縣を侵して國中を擾乱せ。你等疾く東國へ進發
せ賊徒を苅夷げ一國を平定せ。忠戦を励ま軍功を立る輩ハ悉く紀
録して捧よ。平定の後其功ふ應じて賞禄と与ふべしとなり。三将此倫命を奉ふ
て廷上ふ拜伏し臣们勅命を首ふ頂戴て東國ふ発向ひ一命を抛て軍戦を励ま
日ふ勝軍と奏しする間と啓奏。禁廷を退出て列位私邸ふ帰り出陣の准備
を整て。宝亀十一年四月一旬。各将軍装花麗ふ飾り都を發足して東國へ下
り給ぐ。禁廷より八東ふ國奥州へ兵糧米を運送せぐと觸つらさせらるる

金窪腊沢強勇力戦　大伴益之敗軍之條

伊治呰麻呂征東の官軍下向するとゆく。徒党の者ども弘聚て軍議をなす。官軍の寄来る道路の悪所難所に柵を構へ其往来の路を塞ぎ民家を毀ち植を造り富る者の米麦を奪取て兵糧に宛京軍寄来らば徴塵ぶせんと待うけり。就中白河の関の柵に呰麻呂両翼と憑切る。金窪兵太腊沢悪太郎両人を主将とす。七百余人を篭置る。抑金窪腊沢両人はいづれも身枝六尺七八寸にて力量万人に勝る奔馬を抑止る角を曳裂まる弓馬手物の達者あれば要害第一の柵を固めさせ給るあり。去程に官軍は五月上旬奥州に下著す。陣営を構て三日の間軍馬を休め。偖軍の評議す。大伴益之を先陣と紀古佐美を二陣とす。三陣は大将藤原継縄と定めらる。斯て兵馬も十分疲を休られむ。先陣大伴益之二千騎にて押出る。軍珍紀若麻呂逸り立寄合勢の野武士野盗の奴ばら何程の事か有べき只一揉に踏破れと飽まで敵を侮り勇み進て敵の柵へ押寄るに。逆茂木間粗に結所々に大石を捨散す。墓々敷備も無体なる事、されば事を思ふに違はず。あら不便の事共なる由あれば支へ立て麁金にあらん事乃衣さよと一笑す。後陣の續く我も待合さぬと引くと押寄鯨波を殺り植を衝ぜ弛寄せ逆茂木を抜捨て柵に逼り寄破んとす。此時すで賊兵を態と鳴を鎮めて居さうなる。敵の近く寄さる我先を争へ。忽ち柵門を八文字に開て金窪兵太二百騎の士卒を率て撃て出る。兵太が其日の軍装は黒革威の大鎧を着て鍬形打る三枚兜の緒を締四尺余の野太刀を三尺三寸の太刀を十文字に帯添長寸に余る厚毛の弱の太く逞く紀に鏡鞍置て乗り跨て二丈余の鐵鉾を振上げ棒を直向に振廻す。其先に立て大喝す。寄兵に怒て立る所に兵卒も喊を叫り御物と推乃て我先に切立る。思ひ掛ける紀寄兵大に周障り急に退く備を立直る間も

なく兵太馬と躍して敵中へ割く入。當と幸ひ寄と不運と楽て落をゐゞ或ハ首を胴へ逆手入ま。或ハ肩背の骨を碓れ。人も命と舍ふる者。主將如此あれゞ從卒も是ゐ励まされ曳く声て京軍と雄立々る。宜軍多勢なれども金窪淀が強勇ゐ辟易し始の廣言ゐも似ず散くゐ乱立ま。人〻兵を折れて這く孟立の陣へ逃帰りれゝ。金窪ハ手始ようとて手勢を引く柵へ退れ入ゐり。孟立ま先手の敗北をんて大ゐ怒り。新兵を入替再び柵を攻んと押寄ようとまゐ。白河の城戸を開く只騎馬と乗出ま敵あり。京軍其軍壮衣をゐれゞ。藤縄目の鎧ゐ獅子の前立物ま付る兜を猪首ゐ着なり。鵰の羽の征箭山の如く刺る箙を肩黒漆の長れ太刀ゐ引く短刀佩添握太なる重藤の弓ゐ脇ゐ掻込ゐ余る奥州黒の弱ゐ鋳掛地の鞍置く步乗なり。京軍彼ハ誰なるらんと見るゐ。彼武者大音ゐ呼へ出る某ハ膳沢悪太郎と呼まて坂東八ケ國ゐても三本の小児ゐまでも名を知まる者ゐ。京方の人〻ハいまゞ名を知まゞ今度京軍下向あるゐつれ。伊治些呂ゐ頼れ金窪と其此白河の柵を頭つく固ゐ居なり。某们が命有ん限りハ。何十万騎の御勢ありとも得ま通ハゞ手並の程を御覧ゐ入れあ。奥州鍛冶が鍛ひる鏑一筋進せい者。我と思ん人ま出て受て見へゞと呼ハる。京軍見ま出て悪れ敵の廣言ゐと思へども前の金窪が勇鋭ゐ恐て我ま向んとゐ者ゐ少時鳴と鎮て在るところゐ。稲城早手といふ者極く矢取疾の達人なれ。猪金押ゐく陣頭へ馬と乗出高声ゐ。嗚呼ゞれ太言ゐ。你们ゞれ嶋夷の猟矢と鳩雀の類ゐまと。ハま真の武士の身ゐ。ハま一ド矢種の有ん限り射よ我悉く手ゐ拭てん もゞと言返ゞれゞ悪太郎大ゐ怒り重て向答ゐも及ず。七人張の強弓ゐ留行の ごゝれ尖矢手番で忘るゐ。人〻兵殺て矢ゞ切く放ゞ直ゐ二の矢とそげて切て放ゞる其矢次早なる事更ゐ思留る間もなゞり。稲城ハ弦音と共て飛る矢と早く右手

を握り面々を間もなく二の矢飛来つて胸板の正中を背骨かけて射通すなど。何ハ以て堪ぶべき馬より真逆に墜ち落二言と言ど死したりける是を見て京軍の中より平郡武槙田郡司。十名勇夫と云べる者當の敵道きどと三十騎くく馬を相て延出し膳沢が一人を三方より取籠て撃てりをれば。悪太郎心得さると弓投捨て太刀抜拂ひ三人を對手わとり。右に撃左に拂ひ秘術を尽すを挑て戦ひ暫よと是武名く膳沢対さるとて城門を開て二百人斗打て出るを足京軍も五百余騎あて向ひ喚叫で攻戦に此内に膳沢ハ平郡武を一刀に斬て落し又を刀に槙田と續て討人とも云ふ。郡次も者あれど急に身を沈めるるなど膳沢余り強く打て空を切馬の腹に余されて平頸を越大地へ倒ど落さりける郡次勇夫得さり賢どに乗馬より飛下。鞍重て押へる首を掻んとするところに膳沢刻々て起上両人を両手に抗カに任せて敵中へ噇ど投ぜられた。勇夫を士卒二人を撃仆し片足を折さるるに

逃延て命ばかりハ助りける。郡司ハ投られて落さる時首の骨を突折て即死しける。膳沢が挙止人間業とハ見えざりける。悪太郎ハ又馬に打乗太刀と電光のごとく振て敵中を縦横無尽に蒐回り敵を討洩數を知らず。是に依て京軍膳沢一人に斬立られ隊形乱れ〳〵と乱れ浮足に成りける。賊軍勢ひを増蒐地晴に蒐立々々大伴益之ハ先隊の戦ひ難義なりと見て救んと残る五百騎を二隊に押出さんとする所に思もよらぬ山陰より金窪兵太三百騎に成て殺出す益之が勢ハ不意の敵に周章て先隊と救へ追なく金窪が勢と喚叫んで戦ひける。此時賊方も敵の後陣に鯨波の声を揚ると金窪の勢の敵の後陣へ戈入と知押に戦ふ二百人も伐く出膳沢が勢と二隊に成て敵を追捲るに浮き京軍慌てく敗走し益之が陣へ駆る益之ハ是を敵軍襲いかるどと思得今ハ叶ハ一番に馬を拍て逃出しける。徒平も是に続れ惣敗と成て散〳〵に落行賊

軍ハ勝ふ乗て追伐ー思ひくれ不取高名々。宣軍の三陣紀古佐美ハ先陣ー
遥ふ後れく押出ーくるふ。大伴益立ハ初度の合戦ふ伐負ーとゆて手除ふ勢ど
止め先陣の動止を窺合さーむるふ。益立ハ勢惣敗軍ふ及ーと回報ぞる間もお
く早先陣の敗卒追く敗来リくる由へ。古佐美勢ハ左右へ引分て逃来る味方
と通ーも。敵追来らぞ横矢ふ射んと積兵を掘へ矢襖を造て待ケうされども
賊方ハ敵の新兵左右ふ分きて隊ーハ謀有なるぞー長追ふせそと敵ど追捨て手
狂く柵へ引入々る此日賊方ハ紂取首二百余級ふ及び々れぞ。手始よと悦びて勝興と
殺リ京軍ハ兵を多く折た手負数多ふて大ふ軍威とぞ損ーくる

於阿猥河宦軍与夷賊搆戦　大伴益立不覚之條

大伴益立ハ敵を狂ん下て不覚の敗軍ーくれぞ。大将延縄氣色と損ー益立と呼び
出ーて軍慮の足ざると責叱リ又西三日軍議ふ日と送リ。此度ハ紀古佐美ふ一千五

百騎を授て先陣と定め大伴益立ふ一千五百騎を授て二陣とー緒を定めく五
月十三日の未明より打立て金鼓を鳴ー喊を造リ軍威を示て押寄々れば敵も
柵の櫓より防矢を射下ー茲と大夷と禦々るれども京軍ハ兼て手苦を定め二隊労
ろれぞ二隊入替リ。二隊疲るれぞ三隊入替リ漸くふ新兵を以く息とも吐ず射れ
どもおども些とも痩ずど攻立々れぞ。賊方ハふ勢とらひ矢種尽ー力労ぞ々るもく
京軍遂ふ城門堀を打破リ大水のこと入如く攻入々るふぞ。二陣の大伴益立ハ一千
五百騎もひく續て攻入々るふぞ。賊将金窪膳沢も其防ぐ紀を知手勢を引
く柵の後門より立洛々る。是ふ依て紀古佐美白河の柵を乗取勝喊を挙リく
大ふ勇ミ大将の本陣へ斯と報じ々るふぞ。延縄大ふ悦び惣勢と率く柵へ
古佐美ハ手柄を賞美ー其日ハ白河ふ宿陣。翌日柵を焼拂て打立味方ハ
内敵ハ地理を知られぞ伏兵を以く不意を伐ん々るぞ。ふわるどとて行前へ物

見を出し惣勢八千余騎を十隊とし。首尾相佐る備をなして國府をば押到り玉造の館城を構て本陣とし賊徒絲伐の謀議し多る賊將些戸呂京軍玉造の城を構て篭るよしと聞きて鉤出して當あて味方の武勇を示せよとて金窪兵太栗原源三兩人の五百人を授て先陣とし。騰沢悪太郎松前荒鰐二人の五百人を授て二陣とし賊將些戸呂一千人を從へて三陣に進む。別の田理五郎と四人者の五百人を授て遊軍とす。合戦の汐合を見て敵の本陣を劫し大將徒繩太刑取よとて間道より向せり。斯手賦し賊軍隊伍を整へ六月五日の朝柵を打て玉造へぞ向ひける。官軍方も疾より敵の軍を洩さじ其准備をなす。然も六月五日八往亡日なる賊徒是を不知出張さる八已に滅亡を求る前表也と悟び紀古佐美の一千五百人を授て先陣とし二陣八大伴益之一千五百人大將徒繩八二千余騎を領して三陣となり殘る二千騎八玉造の城に遺して留守と德らせる去程に兩陣押進み阿武隈川を隔て互に往合川岸に陣て互に鉦太鼓を打鳴して双方軍威を示し合戦喊を發り矢合の鏑を射違へ矢軍と始るされど敵味方の飛箭八横まぢ雨のごとく矢叫の声々山河に響て大地も踈なる京方の逸雄の面々斯目倦て掌て何時まで矢種を費を為べ川を渡して雌雄を決せよやと口々に呼ゆり歩物の兵三百余人川を颯と渡しまと喚て切てかる金窪が勢得たりと應と。迎へ合して切結び追つ返つ挑みあ紀古佐美是を見て味方討たるる續やと下知をなる徒ひ殘る一千二百人に川へ飛入く大浪の打でく川を渡し陸へ上るや否敵軍に代てかる其勢ひ猛烈なり名だたる小勢の賊兵三倍の軍に捲り立れあらい兼て三町引退むぞ京軍勝に乗て追立て進む敵兵八野武士山賊の集勢にて凶勇なれども軍の進退不鍛煉なれば足並揃ハず隊伍乱れ弥敗色に見へる徒に金窪兵太と京將古佐美を討んと百人斗と從へ路

世麻呂が賊將
金窪兵太
勇を揮つて
京軍を
責破る
金窪兵太

廻りて古佐美が旗本へ馬飛躍して撃てうつる。例の條鉄棒を打揮て人も馬も嫌ひなく撃殺すほど古佐美が勢大いに殘る只一人ほか悩され死亡の者數多人も倒れ靡て乱れ立古佐美も金淫が饒勇に敵へがく馬と拍て避退れ精兵の射人に命じて矢襖に射立させれども。兵太夫くもせず。鎩を頭けて尚も縦横に蒐廻りく敵を打殺すこと十七八騎に及び終に忽ち流箭飛来て兵太が咽喉に入きと立大夫の手あれど尋常の者にあらず其仇に落馬もしべれに無双の剛兵なれど猶も痙ず敵軍を滅多打に撃廻る。是に依て京軍鬼神のごく怖く皆遠く逃散今八手に立敵一人もなし。茲に於て兵太一息わく吐に矢疵の痛堪がたれど郎党添川鬼太と云者に依らして戦場をぞ退れける。大将如是なれど残兵们騒ぎ立左往左往に敗走せり京方の二陣大伴益立繰り八下より渡て敵の後より撃れば。栗原源三前後の敵に途を失ひ進退窮てあ兵紛るゝ人々なるに。賊方二陣膳沢悪太郎五百余騎を魚鱗に備へ煙嵐と巻て狂来り悪太郎真先に馬を進めて益立勢に會釈もなく撃てうつる當る弦幸に切て落さるゝ。麾下の士平们も是に励まされて敵を打是に殘れて益立が勢強ければ栗原蘇りたる心地し膳沢と二隊に成て敵に あくるに依京軍足場を追捲きまくり渡て入えうる。大将延縄八敵方の旗色の整りし弦見て心怒り斯許の敵に勝得ざる吏やあると隊を押出さんとする ところに賊方の遊軍田理五郎何國より廻りて五百余騎に成延縄が陣の後より伐くゝ係。延縄殘れおゝ士卒と下知して是を防ぎ戦國岳源吾門苗六郎小一千騎を授て先陣の味方を佐けめ。自身八千騎にて田理が勢と挑く戦ひ。國岳八兄弟二人心を一致して一千騎にて馬飛真先に進く川を渡し味方の勢に弛加りて古佐美益立が勢是に氣を整し。又敵を追立ける。[illegible]の賊軍數刻の戦ひに疲れし上敵に新兵加りしかば散くに撃られ千員數死數

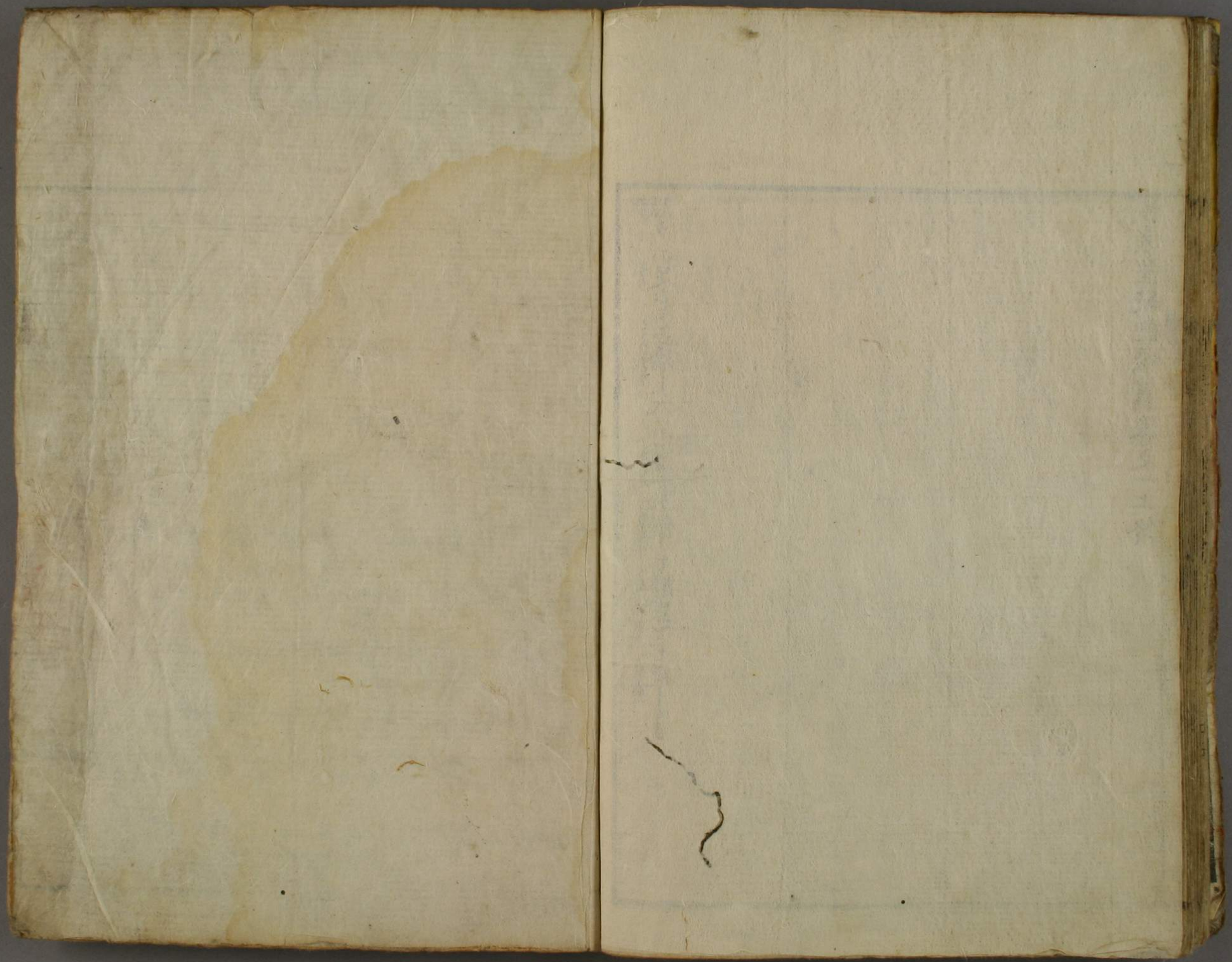
もゝぢど戰ひ十が雜義なりゝるが賊方の大將伊治呰麻呂一千騎の新兵と先隊と〜
土煙を揚ゝ猛来り敗来る味方の士卒と左右に拂ひ十八人が喊を発ゝ襲来る
京軍が呰麻呂合呰麻呂が率ゝ四人寺の太刀と電光のごゝ閃り。敵を斬戮草を
薙如くなれど京軍其太刀風が辟易ゝ又三段引退く。去程が敵味方入乱ま此延
が乘ちゝ彼所が追回ゝ。敵陣ハ味方の陣となり。対つ対きつ戰ひ程が川原乃四
面ハ一場の修羅道となり。馬煙ハ天を暈ゝ足音ハ地が裏き。敵味方の死尸ハ
累ゝとして屠所の肉のごゝ流ゝ血汐ハ滔ゝとして紅葉と浮めり異なび紙さ
屬ゝ摂戰なり此時惣大將継縄ハ田理五郎ゞ勢弱雜なゝ捲り立敵將五
郎と対取れど残卒ハ方へ敗ゝ手が立敵も無なりゝるを。此勢ひが川を渡
して味方が力を添んとせゝ。大伴益立ハ呰麻呂が為が散ゝ仕ゝ馬を拍
て川を越継縄の陣へ駈戻りて大將が向ひ。日もゝやゝ夕陽が及び味方の手負戰

先も多ゝ戰ひ疲ていゝ合戰是迄ゝて軍と收め更へ強ち今日が限る戰ひ
もいまど。夜が入なば敵ハ地理が精ゝれば。恐ゝくハ退呰雜義おいゝ〜言ひ
縄勅旨として大が怒り。是ハ臆病未煉あるやされ糸ゝる。合戰ハ已が味方の勝色
あり今賊軍の疲を伐ぢん。何日ゝ勝利を得る期あゝん。早佐の挙止がせゝま
そこ比ゝ恥ゝるゝが。盃立赤面て口の徑がつゞ。戰場へ向ゝど鈍ゝ玉造へ
て引取る。此時賊方ハ大軍の京勢が懸ゝ已が敗色ゝ見ゝる。益立が手勢ハ主將
のゝ人ゝぞる。周障ゝ主入を如何。ゝ戰死ゝ多ゝ人が非るゝ。敵が向ゝとも
強立ゝる呰麻呂が贈沢栗原坂下ハ是を人るゝより味方と励ゝ須渡敵ハ引色あ
て此機を強ぢ伐やと呼ゝ。宗徒の者ども眞先が立ゝ。狼狽る大伴が勢と落花
微塵が散立れど戰ひ疲ゝ賊兵ハ機を整て勢ひを生ゞ俱が敵を追捲
が。益立ゝ手の者いよゝ猛ゞ乱ゝ散ゝが敗ゝ我先と川と逃渡りゝ是が

依て残る京軍も俱ふ臆病神ふ誘はれ崩るゝ引ゝ賊兵ども信勇ゝゝ追ひ
くく思ひくふ敵を討高名を顕ゝゝ。吉佐美岡岳兄弟八身とあせつゝ味方を
制ゝ留めんとすれど。大軍の引手あひ更ふ耳ももらけぎ敗まと其間ふ吉佐美八敵平
ふ取囲まれ已ふ討るゝゝと。吉佐美ぶ宗徒の郎党ゝ引ゝ及て敵を追拂ひ手ゝと
主戎助け引行ゝる。大将縄縄八味方の敗軍と見ゝ薬を切り是益ゝ覚より
勝負ゝ軍ふ負ゝるぞ安ゝねと怒られゝれども今更奈何とも為うさなく。無念ふぞ
とも ふ玉造へぞ引きゝる。此日の戦ひふ官軍の戦死一千余人矢疵太刀疵を受るひハ
千脚を折ゝる者千二百余ふ及びゝれど。三軍大ふ鋭氣を屈ゝ。皆是大伴
益ゝぶ臆病より叛起まゝと糾らね者ハなゝゝ。些ゝ呂ハ軍ふ打勝て大ふ
勇ゝ勝鬨三度揚て己が柵へ凱陣ゝ軍と黙検るふ田里五郎ゝ先ゝて戦死
四百余人千負三百余人と記ゝれども。敵の首と得る叛一千級ふ向ゝれて京軍

恐ゝふ足ぶと心驕ゝ大ふ酒宴を催て勝軍とぞ祝ゝる

扶桑皇統記後篇巻之一上終



陣里時部
遠原氏事
一大記